

ローマ人への手紙第七八回質問

7 .. 16 自分のしたくないことを行っているなら、私は律法に同意し、それを良いものと認めていることになります。

7 .. 17 ですから、今それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住んでいる罪なのです。

7 .. 18 私は、自分のうちに、すなわち、自分の肉のうちに善が住んでいないことを知っています。私には良いことをしたいという願いがいつもあるのに、実行できないからです。

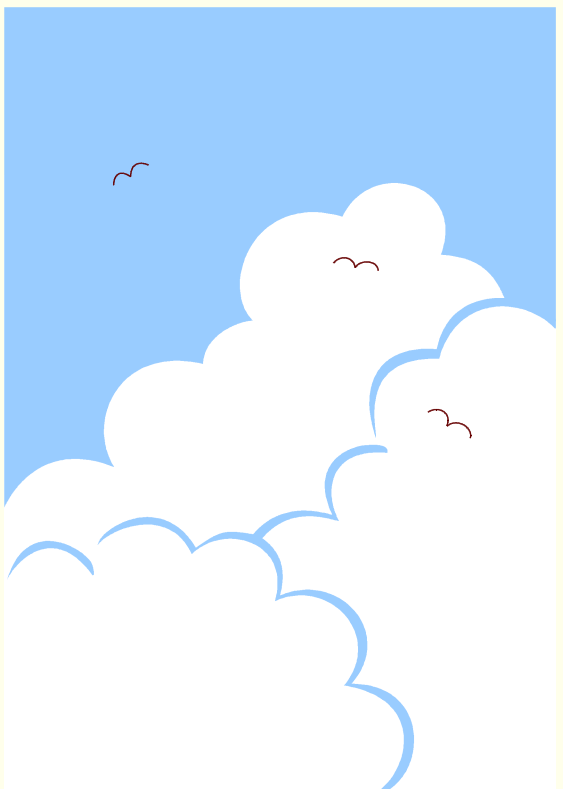
7 .. 19 私は、したいと願う善を行わないで、したくない悪を行っています。

7 .. 20 私が自分でしたくないことをしているなら、それを行っているのは、もはや私ではなく、私のうちに住んでいる罪です。

(ロマ七章一六―二〇節／新改訳2017)

(1)パウロは心の中の戦いを、どのように言っていますか。

(2)パウロが善を行い、神に喜ばれることをしようとすると、どんなことが起こりますか。





心の中の葛藤

(ロマ七章一六―二〇節)

クリスチャンになるまでは、自分のうちにある醜さについては、せいぜい外的なものとしてしかわかりませんでした。内的醜さがわかり、わたしたち自身のうちにある罪について知ることができるようになるのは、むしろクリスチャンになってからです。クリスチャンになるまでは、それほど深く罪について悩むことはありませんでした。しかし、ひとたびクリスチャンになると、罪の現実についてよくわかり、それまで以上に深い罪意識を持つようになります。ここにしるされていることは、そのことです。ここには、クリスチャンのうちにある二重性についてしるしています。この二重性は、生まれ変わっていない人にとっては、決してわからないものです。

「ところで、わたしは自分のしたくないことをしているのだから、律法が良いものであることを認めていることになる。」このように、「律法が良いものであることを認め」ることが出来る人は、生まれ変わった人だけです。「そうすると、それをしてるのは、もはやわたしではなく、わたしのうちに宿っている罪なのである。」ここで、はつきりと生まれ変

わった人、クリスチャンにも罪が宿つていっていると書いています。原罪はクリスチャンの中にもなお存在しているのです。

ここで教えられていることをよく見てみますと、罪は「わたしのうちに宿っている」と言われています。ある人々は、罪について間違つた考え方をしています。罪は人間の外側にあるものであつて、人間自身は中立的な存在だと考えています。そして、罪はわたしたちに外側から誘惑を起こすのだと考えています。しかし、ここで教えられていることはそうではなく、わたしたちの本性の中に罪が宿つているということです。それは、ダビデがその詩篇の中で、「私は咎ある者として生まれ」と言っていることでもありますし、アダムの子孫がみな罪をうちに宿して生まれて来るということでもあります。それについては、すでに五章一二—二一節で述べたとおりです。

それから、パウロは罪の恐るべき力についても教えています。「そうすると、それをしてるのは、もはやわたしではなく、わたしのうちに宿っている罪なのである。」つまり、人間の意志の力よりも強い力として、わたしのうちに宿っている罪の力を述べているわけです。

このことから、今日いくら道徳が叫ばれても、それがいかに無力であるかということがいかにわかっていくものだと思います。人間が罪を持つて以上、人間は自分の意志でその道徳を守ることができないのです。人間は自分の意志よりも強い罪の力によつて、守れないようにされてしまっているからです。ですから、今日の道徳的に混乱を極めた時代にあつて、

いくら道徳的なことを教えても、それだけではどうにもなりません。罪の問題を正しく処理しないかぎり、問題の解決には至りません。

次に一八―二〇節を見てみましょう。「というのは、わたしのうち、すなわち、わたしの肉のうちには、善が宿っていないことを、わたしは知っている。善をしたいという願いは、いつもわたしのうちにあるのだが、それを実行できないからである。なぜなら、わたしがしたいと願う善はしないで、したくないと思う悪ばかりをするからである。ところで、わたしは自分のしたくないことをしているのだから、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしのうちに宿っている罪なのである。」この文章をよく見てみると、わたしたちのうちにある二重性について述べています。ここでは「わたし」という同じことばが二つの別の意味で使われています。たとえば一八節で、「善をしたいという願いは、いつもわたしのうちにあるのだが」と言っている「わたし」と、「それを実行できない」わたしです。また一九節で、「わたしがしたいと願う善」と言っている時の「わたし」と、「したくないと思う悪ばかりする」わたしです。

しかし、ここでパウロが述べているわたしのうちにある二重性を、初代教会の時代にあった霊肉二元論の異端のように解釈してはなりません。肉体は悪だが霊は良いといったような二元論を述べているものではありません。それは、前に「肉」ということばの意味について説明した時に言いました。ここで使われている「肉」とは、肉体のことではないからで

す。

それでは、パウロがここで述べているのは、どういう意味なのでしょう。それは、罪の恐るべき力について述べているのです。一四―二五節のこの個所の序論ともいべき一三節を見てみましょう。「それでは、この良いもの（律法）が、わたしにとって死をもたらすものになったのだろうか。断じてそうではない。罪は、それが罪であることの現われるために、良いもの（律法）によって、わたしを死に至らせたのである。これは、戒めによって、罪がいつそうはつきり罪深いものとなるためなのである。」パウロは、この恐るべき罪がわたしたちのうちに宿っていることを示そうとしています。この恐るべき罪の力がわたしたちを無力な人間にしてしまうのです。

パウロはさらに、聖く、正しく、良いものである、神の律法が霊的な性格のものであることを認めたとしても、それがわたしたちを罪から救い出すことは絶対にできないことを示しております。ですから、このように神の律法でも人間を罪から救い出すことはできないのですから、たかだか人間の知恵や知識の集大成にすぎない教育学や心理学や社会学など人間の学問が人を罪から救い出すことなど不可能なのです。多くの人々はそれを知りません。そして飽くなき努力、むなし努力を重ねております。それは砂上の楼閣にすぎません。パウロがここで語っていることは、決して心理学的分析ではありません。彼の関心事は、あくまでも律法が人を救いえないということ。律法や罪の性質がわかれば、そのことは

よくわかるはずです。律法は、神の救いのご計画の中で正しく位置づけられることが大切です。そうでないと、律法廃棄主義者のようになってしまいか、さもなければ、律法主義者の誤りに陥ってしまいうでしょう。また、罪について正しく知らないと、罪を安易に考えて、失敗しかねません。

わたしたちの解決は、律法ではなくキリストにあります。「わたしの兄弟たち。それだから、あなたがたもキリストのからだを通して律法に死んだのである。それは、あなたがたが他の人、すなわち死人の中からよみがえられた方（キリスト）のものとなり、こうして、わたしたちが神のために実を結ぶようになるためなのである。」⁽²⁾「わたしたちが肉によって無力になったために、律法ができなくなっていたことを、神はしてくださった。御子を罪ある肉と同じ姿⁽³⁾でお遣わしになり、その肉において罪を断罪されたのである。」

このように、クリスチャンは、その人格のうちに二重性があります。これは、いわゆる二重人格と呼ばれているものは違い、救いがまだ完成の途上にあるがための二重性です。それは、律法を良いものと認め、それをしたと思う自分と、それができない自分です。なぜできないのかと言うと、それをしたと思う自分よりも強い罪の力があって、それに打ち負かされてしまうのです。このような葛藤を心の中に持っているのがクリスチャンなのです。それでは、そのような葛藤に打ち勝つには、どうしたらよいのでしょうか。神はすでに御子をこの世に遣わし、わたしたちの罪を十字架上で断罪されました。ですから、「もはや肉に従って歩かず、御霊に従

って歩くわたしたちに、律法の要求することが完全に満たされる」という形で、解決が与えられるのです。

注(1)詩篇五一篇五節 新改訳。

(2)ローマ教会への手紙七章四節。

(3)同書八章三節。

尾山令仁・ローマ教会への手紙講解(ロイドジョンズ・ロマ書講解要約)より

